2013年9月8日の福井新聞にのっちゃいました

ふくい
至福の時間

スクエアダンス

手を取り合えば笑顔に。

隊形を変えながら手を取って踊るスクエアダンス。踊り手たちの顔には笑みが浮かんでいる＝福井市

陽気な音楽がひとたび始まれば、4ペア8人の踊り手たちは手を取り、軽やかな足取りで前へ左右へ移動、ターン。隊形は正方形や円形、2列横隊など次々と変化する。相方もどんどん入れ替わり、新たな相方とハイタッチのように手のひらを合わせ会釈をしたり、軽く抱擁を交わせ会釈をしたり。「ヤッホー」「ハイハイ」と陽気な声まで飛び交う。

「手をつないで踊ると自然と笑顔が出てくる」とは、夫婦でスクエアダンスを楽しむ山下政信さん(65)＝福井市。踊り始めると、まじめな固い表情が不思議と緩んでくる。妻の恵理子さん(62)も「いろんな人と仲良くなれる。つながりができて喜びが湧いてくる感じ」と同感だ。

山下さん夫妻がスクエアダンスを始めたのは、2人が退職した5年半前。「2人で費やす時間が増え、共通の趣味がほしかった」と恵理子さん。仕事をしていた時は仲間作りに消極的だった政信さんを半ば強引に体験会へ誘った。「明るくて楽しく和やかな感じだった。あんなに笑っているんだから、きっと楽しいんだろうと少し驚いた」。踊ってみると「音楽に乗ると気分が出てくる。体を動かすと気持ちいい」。一方、政信さんは「抵抗感があった。踊りを指示する掛け声も何を言っているのかさっぱり分からなかった」。

政信さんが踊るのは小学校でのフォークダンス以来。「音楽に乗るのも必死。掛け声を聞き取って動くのも大変。でも、間違えても笑いが出る。誰かがカバーしてくれる」。ちょっとずつ踊りが頭に入り、「上達していくのがうれしかった。休憩中の仲間との会話で楽しみは倍増」。今ではすっかり教室に溶け込み、政信さんの方が積極的に練習に参加するほどだ。

年に3、4回、夫婦で旅行を兼ね県外のダンスパーティーに参加する。「交流は初対面でも盛り上がる。2、3度と会えばさらに会話も弾む」(政信さん)。踊りや旅行といった話に花を咲かせる。年がいもなく、ピンクや花柄など季節に合わせ、かわいらしい衣装を着られるのもパーティーならでは(恵理子さん)。衣装のデザインは自分で考える。

「(パーティーの)帰宅後も話題があるの。あの人みたいに踊りたいとか、あのコスチュームがすてきだったとか。夫婦での会話が増えた」と恵理子さん。政信さんは「内面から若くなった気がする」と満面の笑みを浮かべた。

踊りが終われば、輪になって一言。「サンキュー」

ペアになって踊る山下さん夫妻。スクエアダンスを始めて、2人の会話が増えたという

歩く動きがメーン

米国の軽快なカントリー&ウエスタンミュージックに乗って踊る「スクエアダンス」。福井スクエアダンスの会長の青木京子さん(福井市)は「ダンスといっても歩くのがメーン。あちこちへ動いて、いつの間にか元の位置へ戻ってるカームのよう」と話す。

スクエアダンスは米国のフォークダンスの一つで、男女4ペア8人が1セットになり、手を取って踊り歩き隊形を変える。「本場米国では夫婦やカップルで踊りに参加します。日本では単身で参加するメンバーが多く必ずしも男女がペアとは限りません」。日本には女性を中心に約1万5千人の愛好者がいるという。

「一般的なフォークダンスと大きく異なるのは踊りの振付があらかじめ決まっていないこと。踊り手は、踊りを指示する係(コーラー)の声を聞き取り体を動かすように行動にする。コーラーは踊り手を楽しませようと工夫して動きを構成する。選曲も伝統的な音楽だけでなく、はやりの歌謡曲や太鼓を使った音楽を使うこともある。踊り手は頭の中は空っぽで参加して大丈夫。その場へ行ったら後は踊って楽しむだけです」

コーラーの掛け声(コール)はすべて英語だ。「ダンスもコールも世界共通。外国人と会話はできなくても、ダンスは一緒に楽しめます」。コールは「ライト(右)」や「バッスル(腰を振る)」、「トレード(入れ替え)」のように日本でも使われている簡単なものばかり」とし「初めての人でも、2時間あれば10通りぐらいの基本的な動きとコールを覚えて踊れるようになります」。

米や日本のほか、カナダやイギリス、フランス、オーストラリアなど各国で国際交流大会が開かれており、県内からも愛好家たちが参加している。

「車いすの人や目が見えない人も一緒に踊ります。コールが分かれば誰でも楽しめます」

青木さんは「スクエアダンスはウオーキングの延長。何の準備もいらず、室内で行うので天候にも左右されません。耳で聞き取り反応して動くので頭の体操にもなります」と話している。

(文・八杉智子、写真・飯野智彦)